



24の国・地域のグランプリほか日本各賞決定

神奈川県・藤沢市立駒寄小学校の^{えびさわ}海老澤 ^{つかさ}元さん（9歳）

日本のグランプリを受賞

三菱広報委員会（三菱グループ関連企業 40 社で構成 会長：小島順彦）、公益社団法人 日本ユニネスコ協会連盟（会長：松田昌士）などでは、2010 年 6 月から今年 1 月にかけて日本を含むアジア 24 の国・地域の子どもたちから日常の生活を描いた絵日記を募集しました。

本事業は、アジアの子どもたちの絵日記を通じてアジアをより深く理解し、交流の輪を広げることを目的に実施、今期で第 10 期となります。

この度、各国・地域の国内選考会を経て日本に集まった 192 作品の中から、各国・地域ごとのグランプリならびに主催者賞他、各賞を決定いたしました。また今期 10 期という節目を迎え、日本でのみ新たに佳作として 82 作品、加えて優秀団体賞として 16 の小学校等を表彰しました。

（応募総数は 77,338 作品。うち日本の応募数 4,072 作品。本事業の前身である「アジア子供アート・フェスティバル」からの応募総数合計は 564,612）

各国・地域のグランプリ受賞者・作品、日本の各賞受賞者、選考委員による講評は別紙の通りです。

尚、今年 7 月末に予定されておりました大韓民国・ソウルでの「アジアスタディーツアー」は中止となりました。このツアーでは、参加各国・地域の受賞者同士の交流、現地子どもたちとの交流、名所旧跡訪問などが予定されていました。

<本件に関する問い合わせ先>

三菱アジア子ども絵日記フェスタ広報事務局 TEL.03-3555-2338 FAX.03-3555-9652
〒104-8552 東京都中央区新富 1-14-8 松永新富ビル 4F

<参考>

三菱アジア子ども絵日記フェスタ とは・・・

本事業は、アジアの子どもたちの絵日記を通じてアジアをより深く理解するとともに交流の輪を広げ、さらに識字教育支援を目指して1990年より16年間実施した「アジア子供アート・フェスティバル（応募総数 327,443 作品）」を前身としています。この成果を踏まえて、次世代を担うアジアの子どもたちがともによりよい未来を築けるよう、互いの文化を理解し尊重するための支援活動として、2006年より「三菱アジア子ども絵日記フェスタ」を開催しています。

募集対象はアジア24の国・地域に暮らす6歳から12歳の子どもたちで、募集作品は「伝えたいな、私の生活」をテーマにした5枚1組の絵日記です。

応募作品は、まず各国・地域ごとの国内審査で各8作品、合計192作品が選ばれます。さらに日本で行う国際選考会（選考委員長：大沼映夫）でグランプリ（各国・地域から1作品）、三菱広報委員会賞（各国・地域から1作品）、アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟賞（各国・地域から1作品）、日本ユネスコ協会連盟賞（各国・地域から1作品）、優秀賞（各国・地域から4作品）が決定いたします。

- 主催 三菱広報委員会（会長：小島 順彦）
アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟（会長：松田 昌士）
公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟（会長：松田 昌士）
- 後援 ユネスコ（国連教育科学文化機関）
- 参加国・地域 アジア24の国・地域
バングラデシュ／ブータン／ブルネイ／カンボジア／中華人民共和国／インド／
インドネシア／カザフスタン／大韓民国／ラオス／マレーシア／モルディブ／
モンゴル／ミャンマー／ネパール／パキスタン／フィリピン／シンガポール／
スリランカ／中国—台北／タイ／東ティモール／ベトナム（アルファベット順）／
日本
- 選考委員 選考委員長：大沼映夫（洋画家・東京芸術大学名誉教授・文星芸術大学副学長）
選考副委員長：佐藤一郎（洋画家・東京芸術大学教授）
選考委員：C.W. ニコル（作家）／大石芳野（写真家）／池上彰（ジャーナリスト）
里中満智子（マンガ家・大阪芸術大学教授）
- ホームページ <http://enikki.mitsubishi.or.jp>
事業概要や本事業の前身である「アジア子供アート・フェスティバル」第1期から第9期までの全入賞作品などを紹介しています。
※今回の「三菱アジア子ども絵日記フェスタ」入賞作品については、順次掲載予定。

三菱アジア子ども絵日記フェスタ 選考委員講評

●大沼映夫 選考委員長（洋画家・東京芸術大学名誉教授・文星芸術大学副学長）

2011. 3. 11. 東日本に大地震、大津波、原発事故と私たちにとって未曾有の大震災です。直接被害に遭わなかった私でも気が滅入りますが、アジアの子ども絵日記の作品選考に入った瞬間、気力が充実してきました。

純粋な心と、自由で奔放な素晴らしい作品を拝見しながら、お国柄や同じ国の子どもでも生活や感性の違いがあり大変興味深く見ることができました。今回は、カザフスタン、モンゴル、ミャンマー、ネパール、スリランカ等の国の色彩が美しく、画面に張りのある色の緊張感があつたように思いました。

いつも画材が不足しているのではないかと心配していた東ティモール民主共和国のみなさんの絵が、前回より色が少し強かついていたので安心しました。

日本は物にかこまれ、物事を良く学習しているなど感じました。

又、テレビゲームなどのある国の子どもよりも、家事の手伝いや動物の世話をしたり、森や川の自然で遊ぶ子どもたちの方が生き生きとしています。ベトナムのファム ゴック フィ トアン君（男性 6 歳）の町は、毎年洪水があります。たくさんの木や家、建物が倒れます。自動車、水牛がゆっくりと水に沈んでいくんだそうです。あきらめないで、日本も同様、一日も早い復興をお祈りいたします。

●佐藤一郎 選考副委員長（洋画家・東京芸術大学教授）

「三菱アジア子ども絵日記フェスタ」の選考委員として、はじめてアジアの国々の子どもの絵日記をまじかにたくさん見ることができました。東は中国、韓国、日本、西はパキスタン、インド、南はインドネシア、東ティモール、北はカザフスタン、モンゴルなど、24 の国々の子どもたちの絵日記です。アジアは広いなと思いました。

一人ひとりの絵日記を眺めると、地球規模でグローバル化している文化状況を反映していると同時に、自分の住んでいる風土に包まれて生活しているその時々「喜びと楽しみ」とが感じ取れます。もう一歩踏み込んでみると、自分たちの生活に対する「誇りと祈り」の感情さえ表現されています。アジア、ひいては全世界の子どもたちと交流したい自分を意識し、子どもみずからの目線で世界に発信しようとしています。生き生きとした生きる力の発露として、子どもたちは画面に立ち向かっていますが、その生命力の躍動の表れは多様です。

身体の運動がそのまま手に乗り移り、それが描線の力となっている子。色彩と色彩との対比が強調されて、まばゆい画面になっている子。穏やかな色彩と色彩の美しい調和が奏でられている子。人物とそれを取り囲む風景や室内をどのように組み合わせ、画面の世界を作り出すのか工夫している子。遠近感をどのようにして画面で表現するのか自分なりに発見している子。画面だけではなく、文章の字体をも含めて、装飾を施して、絵と文の一体化を試みる子。じつにさまざまな子どもたちです。

このような子どもたちの平和を享受したいとする世界観を育むやさやかな試みとして、この「子ども絵日記フェスタ」のプロジェクトは貴重です。今後ますます進展することを、私は願いたいと思いました。

●C. W. ニコル 選考委員（作家）

毎回、アジアの子どもたちの絵日記を見るのは、とてもためになる楽しい宿題です。しかし作品を選考して順位をつけるのは、つらいです。子どもたちの絵日記を通して、人間の生き方、世界、社会、考え方をのぞく貴重な経験になります。

物にあふれ、表面から見ると豊かで、科学・技術が進んでいる国々と比べて、（日本から見ると）あまり電気製品やプラスチック製品などは多くない、それほど近代的ではない国々の子どもたちの、自分の周りに対する生き生きとした感じ方のほうが、はるかにまことの豊かさがあります。

自然に近い、無駄がない生活は、実になつかしい良いものです。文章と絵には、香り、色、動きがあります。家族、友達、学校、国、それから人生をととても大切にしている感じがします。周りの自然、家畜、畑、子どもたちが大好きな祭り・・・みんなうらやましいくらいに生き生きしています。

特に、今の日本人はその国々の子どもたちの生き方と考え方から学ぶことが多いと思います。

●大石芳野 選考委員（写真家）

子どもたちが描いたこれらの絵日記は希望にあふれています。どの作品にもアジアに生活する固有の文化や暮らしぶりが滲み出ていて興味をそそられます。家族や友だちとの絆、日々の暮らしのなかで見つけた些細な出来事、いつも当たり前前に接している自然からの発見、祭りなどでの気持ちの高揚といったさまざまなことについて、子どもたちは幼いながらもしっかりとした確かな立ち位置を持って、心を込めて表現しています。その様子は大人たちを考えさせるものです。

日々は嬉しいばかりではないし、悲しく辛いこともあるでしょう。いったいそれはなぜ？ 子どもたちは悩みながらも希望に向かって走ります。だからこそ、遭遇したことを凜と主張しようとする気持ちを持っていることについてまた知らされました。たとえばカンボジアでは二人の子どもが家庭内暴力に触れています。いかに子どもたちの心を痛めているかは、日本でも同じような悩みが少なくないだけに気になります。社会の明るい面をきちんと見据えてくれていることに安堵しますが、同時に、これらの絵日記がわたしたち大人の負の面も突きつけていることに考えさせられます。また、インドネシアの西スマトラ州のある島は地震、津波、水没の危機にひんしていると描かれています。日本も、大震災による被災、被害などでみんなが不安と動揺の最中にあります。それだけに幼い子どもたちの心の内側の苦悩を思わずにはいられません。

そして12歳くらいにもなると自分や周囲を見る目がかなり成長していることを絵日記が語っています。一方、6歳くらいの視点の大胆さには色づかいや筆のタッチなども含めて、大きな可能性がみなぎっているようなものも多くありました。エッ、これが子どもの絵筆なのかしらと思うような立派な絵画もあります。男の子も女の子もだれもがみな自立した芸術家としてここに存在していることを、今回も痛感させられています。

子どもたちからそれぞれの思いの深さが伝わってくるだけに、わたしは選考しながら元気と勇気、そして愛の深さなどたくさんの贈りものをいただきました。

●池上彰 選考委員（ジャーナリスト）

今回もアジア各国から多彩な作品が送られてきました。参加国・地域が順調に増え続けていることは、嬉しいかぎりです。

毎回のことですが、国によって、作品のタッチは大きく異なります。華やかな色づかいと大胆な構図に圧倒される作品もあれば、淡い色鉛筆で描くのがやっとの子どもたちが多い国もあります。アジアは実に多様です。国の経済力の差が如実に出てしまうのです。

でも、みんな自分の国が大好き。そして家族が大好き。おじいちゃんやおばあちゃんを描いた作品も多く、大家族のつながりを感じさせます。

各国の事情と、それぞれの子どもたちの生き生きとした生活ぶり。そんな楽しさが、ひとつひとつの絵日記から立ち昇ってくるのです。

●里中満智子 選考委員（マンガ家・大阪芸術大学教授）

子どもたちが絵日記で日常を描こうとする時、必ず、自分の中でもう一度「楽しかったこと」を振り返り、記憶を整理しようとするはず。「文章だったら、何をどう書けば、伝わるか?」「絵だったら、どんな絵を描けばいいのか?」そう考えて、工夫する、その過程が、子どもたちに自分の「考え、感想、生活の意味」について考え、成長するためのきっかけになっている一と、私は思います。

絵日記は、世界中の子どもに描いて欲しい素晴らしい表現方法です。

今回も多くの作品を見ながら、年齢や生活習慣に関わらず、出品してきた子ども達はみな「気力にあふれている」という感想をもち、嬉しくなりました。きっと「絵を描くことから、もう一度よく見てみよう」と言う観察眼も、絵日記を描く事で育ったかも...と思います。

国と地域によって、いわゆる「実力の差」はあります。これは普段どのような本や絵に接しているのか、の違いかも...と考えられます。ただし一年々、この差が小さくなっている事が生活の差が小さくなる事とイコールだと感じ、少しほっとしています。もっと、この差が小さくなり、やがて無くなる日を心待ちにしています。ただ一使用画材の差は、驚く程小さくなってきていて、これにはかなり大きい「ほっ」がもれました。